



祐介の目

No.129

大田祐介 (福山市議会議員)

永井啓三氏は、昭和48年に政府派遣団の一員として遺骨収容に訪れ、日本大使公邸でト部大使から次のようなエピソードを聞いた。

大統領はゲリラとして日本軍の捕虜となつたが、「日本軍がボロボロの服を着て戦っているのを見て、自分はずわい身であつたが日本軍に協力しようと思つた。日本軍のためなら死んでも構わないと思つていた。最後まで戦つた日本軍に対して敬服している。」と述べたそうだ。

新市町出身の永井氏は50年前の遺骨収容において、自己の使命に対して最善を尽くす事は、他民族に通じ、また国境を越えて万世に輝くものであることを痛感したそうだ。遺骨収容に当たっては、大統領から陸・海・空・警察の四軍と州知事等に命令が出されていたので、各地とも一辺境にいたるまで好意的な協力を得ることができたという。

じつは私もレイテ島タクロバン市を訪問した際にボンボンに会つたことがある。その時の市民の歓迎ぶりは印象深かつた。実力は未知数だが、投票率は80%を超え、史上最多の三千万票を得たマルコス新大統領に曰比関係におけるさらなる発展を期待したい。

マルコス大統領

フィリピンのマルコス元大統領の息子であるボンボン・マルコスが大統領に当選した日本のマスコミは、マルコス元大統領は独裁者で戒厳令を敷き多くの市民を拷問し、不正蓄財をした結果、ピープルパワー革命により国外追放された云々。その息子が大統領とは・・・のワンパターン。

これでは投票したフィリピン国民は皆バカであると言っているようなものだ。なぜマルコス一族がいまだに人気があるのか、それは良いこともしたからに違いない。例えば、戦後長らく日本兵の遺骨はジャングルに放置されていたが、対日感情も悪いことから日本政府はなかなか遺骨の収容に取り掛かれなかった。この門戸を開いたのがマルコス大統領であり、ルバング島で相当数の住民を殺傷した小野田少尉の恩赦もしてくれた。福山四一連隊の生還者であ